

水かがみ

文／岡部伊都子
写真／井上博道
淡交社刊

水かがみ ©

文／岡部伊都子 写真／井上博道

昭和43年10月13日 初版発行

¥ 750



発行者

納屋嘉治

発行所

株式会社 淡交社

本社 京都市北区堀川通鞍馬口上ル
支社 東京都千代田区麹町4ノ5
第7麹町ビル 振替京都4578

グラフィック印刷 日本写真印刷株式会社

活版印刷 内外印刷株式会社

製本 大日本製本紙工株式会社

水
か
が
み

目次

那智大滝	熊野三社	5
鳴神の舞台	雲ヶ畑志明院	13
神の小川	上賀茂神社・下鴨神社	18
仏影の關伽井	秋篠寺	23
醍醐味	醍醐寺上醍醐	27
寒行の滝	能勢妙見	31
お水取	奈良二月堂	39
お水送	若狹鶴の瀬	53
雨の女神	室生龍穴神社	57

水路橋

南禪寺境内

61

声明の里

大原魚山

65

さくらの池

大沢の池・広沢の池

71

浼浼横流

宇治川

78

紙漉き川

黒谷和紙

85

古墳の濠

崇神陵・垂仁陵

94

善気水

法然院

99

玉川とお茶

井手町・宇治田原町

104

淡海の海

琵琶湖

110

あとがき

116

道しるべ

118

那智大滝 熊野三社

人影のない坂道をのぼる。

斜面にそそりたつ大杉と大杉との間から、那智の滝の落下がみえる。まっすぐな、長い白滝が、強い風にしぶきをなびかせている。そこに日があたって、夢幻の魂のような、虹がゆらめきたつ。

自然の豪奢、私は滝が大好きだ。

もちろん、清流のしぶきでなければ困るけれど、日本の滝は、まだまだ清冽で神韻ひょうびようたるものがある。とくに、那智の滝は、滝そのものが信仰の対象となっている。昔、熊野灘を航行する舟人たちは、海上はるかにお滝をのぞんで拝んだという。高きから低きになだれ落つ、ただその方則に従う水の姿のひとつであるが、滝にもそのひとつひとつに、異なった風情が備わっている。流れきた川が、急な断崖にであって滝と化したところの周囲の風景や地形、落下の角度や水量などによって滝自身の雰囲気がかもしだされるのである。

写真や絵で、那智の滝がすぐわかるのは、その厳正な姿ゆえである。いかにもまっすぐで堂々とし

ている。長さもずばぬけている。この大滝には、素直に人を合掌せしめる天然の威がある。

午後の陽に虹をきらめかせている大滝のそばを、のぼってゆく。水のもっとも少ない二月の滝である。しかしその二月の冷えも、きびしい京の冷えからみると、うんとあたたかい。南国らしく菜の花の咲いているのを、車窓からみかけたくらいである。山道にも、可憐な白い花が、いちめんに咲いている。小さな星のような愛くるしい花だ。

二の滝へ進もうとするあたりから、山道は急に狭くなる。片方は崖、落ちないようにと足を踏みしめ、手で岩をつたって歩く。あとできくところによると、このあたりはまむしが多くて、とても歩けるものではないという。だが、ま冬のありがたさ。そんな事とは考えもしないで難所に汗さえ覚え、コートやショールをはずしてのぼった。

谷川の屈折しているあたりで川におりたち、岩をつたって、滝口の方へとたどった。なんといっても、水は冷たい。雪ものこっている。岩は凍っている。すべらないように注意しながら、かがんで、美しいお水のをむ。那智のお滝の上流の水。身にしみわたるお水である。

しめ縄をはった落下口がみえてきた。先に落ち口についたカメラの井上さんが、渡り兼ねてためらっている私と淡交社の森川さんを見て、いきなり靴をぬぎ靴下をぬいで、こちら岸へ渡ってこられる。せっかくここまできて、熊野灘を望まないのは惜しい、渡してやろうとの親切からである。

そのやさしさに、私たちもすぐ、はきものを脱いで岸に並べた。私は足袋をとって素足を川水にそ

つといれる。岩がぬるぬるとしているが、気持のよい流れである。流れは相当に速い。うつかりして
いると流れにひきいれられそうになる。冷たさにたちまち真っ赤になった足も、向こう岸にあらがって
みるとかえってあたたかな感じがした。

あ、と息をのむ。しめ縄の向こうに、すばらしい海がひらけている。早春のうるおいにみちて輝く
青い海、熊野灘。ここから観音浄土に往生するのだといって、補陀落渡海の舟をこぎいだした海であ
る。熊野三山は、神仏混淆、本地垂迹説が、濃密にからまりあつて神道、仏教、修験道など、あらゆ
る要素にみちている。ふしぎな霊地、生死の境とも思われていた。とくに、平安末期から中世にかけ
て、浄土信仰が盛んになった時には、この南にひらける海を、観音のおわします補陀落浄土へ通う道
とした。おびただしい貴顕諸民がこの海の果てをあこがれた。穢土であるこの世から、はやく浄土へ
まいりたいと願った人びとは、さまざまな形の死を考えた。捨身、入定、焼身、そして、補陀落渡海。
同じ水葬をするのでも、浄土に通う海へ送ったほうがよいと思うように、生きながら、死の船にのつ
てこの浜の宮から出発したものらしい。

『平家物語』にみえる“維盛入水”も、そのひとつといえるであろう。いまはほとんど訪れる人も
ない浜の宮王子社、そしてその隣の補陀落山寺。この浜辺はどのように思いつめた人びとの足にふま
れ、また、それを送る人びとの涙を吸ったことであろう。重盛の子維盛は、その妻子への思いに耐え
かねて“八島の館”を出てしまう。たとえ一目でも恋しい人の顔をみたいと思う一心だが、やはり、

京にははいれない。高野山にのぼって滝口入道時頼に逢い、やがて熊野三山に詣でて浜の宮より一葉の船を漕ぎいだす。

沖の山成の島に生うる松の木を削って、みずからの名を記し

生年二十七歳、寿永三年三月廿八日、那智の奥にて入水す。

と書きつけてまた沖へでたが、最後の最後まで、この世の恩愛に執着はのこる。ようやくしぶる心を強くし、滝口入道の励ましを善知識に「南無」と唱えて海にはいる。従者たちもつづいて入水する。たとえいかなる靈妙の浄土があらうとも、維盛にとっては、恋しい妻子のそば以外に浄土はなかったであろう。ひとしと身にそう、その妻子の面影は、海の面にも空の彼方にも浮かんできたことだろう。維盛はその面影めがけて、沈んでいったのだ。

はろばろとひろがる海に、人間の心につきまとう愛欲煩惱のあわれさを思う。思おうとして思った心ではなく、どうしようもなく思わしめられる思いであるが、人間の感情のもっともせつないのは、親の子を思い、男女の、異性をいとおしむ心であろうか。憎む心、嫌う心、怠ける心など、自分でも自分がいやになるような、不愉快な心がつねに渦巻く。そういうなかで、自分がよろこべるような自分の心を、ひきだしてくれる相手は、どのようにも尊く、いとおしいのである。このいとおしむ心のせつなさは、生甲斐でもあるだろう。また、それゆえに哀別離苦の苦しみはいっそう深いのだ。

気がつけば那智のお滝は、わが足もとからしぶきをあげて、なだれ落ちてゐる。清らかなあたりの

氣配の中で、この人間たちの想念はいかにもつつましく、いじらしく思える。しかもまた、永遠の想念となつて、お滝とともになだれ落ちていようでもある。このお滝は、いわゆるお滝の行をするものにしてはあまりに巨大な滝であり、水量である。が、修験者や修行僧で、お滝に打たれた行者も多い。なかでも有名なのは、やはり『平家物語』にみえる「文覚荒行」である。

文覚もまた、その出家の因として、熱烈な恋ゆえの罪が伝えられている。渡辺渡の妻となっている袈裟のあまりの美しさに、袈裟をくどき落とし、その言うとおりに夫を殺す。しかし、それは袈裟の苦衷くちゆうのいたす結果で、身代わりにたつた袈裟の首を切っていたのだ。

その夫を殺しても奪つてわがものにしたいと願つた、恋しい女人をみずから殺す。文覚はまことに荒々しい性格で、繊細な女人の心情をいつくしむことができなかった。女人は、からだよりもまず心を心でいつくしまれたものである。心の形としてのからだだが、大切なのだ。

あまりの強引さに女人には通じなかった文覚のまごころは、神仏には直ちに通じたらしい。文覚はこの滝の滝壺に頸際まで漬かつて慈救じきうの咒を唱えていた。四五日にも成つて文覚は浮きあがつて滝の勢いに流されたが、美しい童子がきて文覚を救う。救けられた文覚は「自分は二十一日の滝行の願をもっているのに、まだわずかな日のうちに何者が救けたのだ」といつてまた滝に打たれにはいった。

第二日には八人の童子が引きあげようとしたのに、つかみおうてあがらず、三日目には息をとめてしまう。その時、滝の上より天童二人がおりてきて「よに媛あなかに香かうき御手を以て」文覚をなでる。

息をふきかえした文覚は、不動明王の命によって金迦羅、逝多伽二童子が救いにきたといわれて歓喜する。そして無事に大願を果たして日本国中の修験行場で行じ重ねたという。これだけの大滝、文覚の修行したのは、やはり水の少ないま冬だったようだが、それにしても、冷えと水勢は、思っただけでもおそろしい。

毎年二回、このしめ縄を新しく張りかえるそうで、その冬の時は冷たく、夏は水量がゆたかで流れが激しいため、ロープを渡すのに危険を感じると、神官の方たちのお話であった。ありがたいご縁で、そのしめ縄の下にたち、とどろく大滝をこえて補陀落浄土の海をのぞむ。この川水にみそぎした足をぬぐってふたたび、山をおりた。二の滝、三の滝は、水がほとんどない時期だった。

滝壺近くにもうけられたお滝の拝所から仰ぐ三重の滝は、だんだん、暮れてゆくあたりの暗さの中で、白さを増してゆく。たくさんの参拝者は拍手をうち、祈念しては去る。いまさらお滝に向かい何を祈ることとてない人びともひたすらに、清浄なるお水への尊崇を、あらわしているのだろう。この夜は、那智大社の宿房に泊めてもらう。夕刻から夜にはいつてしまうまで、部屋の窓を開けはなつて、ま正面にみえる滝に見入っていた。一条の白滝のくらやみに吸われてゆくまでの、ほの白いつかさ。余韻ののこる気高さである。

那智大社の宝物館にある室町時代作の熊野那智曼荼羅には、さまざまな物語や史実や信仰形態が、

みんなとりいれて描かれていた。お滝ではふたりの童子に助けられている文寛があり、社殿には貴人の一行がいる。浜の鳥居からは、補陀落渡海の舟が、仕立てられている。面白いのは観光拝観料の関と同じように、信仰の時代にもっと細かく関所がつくられていることだ。お金がなくて中にはいれぬ者もいる。こんなにたくさん関所があるとは、想像もしていなかった。これでは、熊野詣は、心身のみならず物質的な点でも難行であったことがうかがわれる。

こういった絵図は、比丘や比丘尼の絵解き説教のために、たくさんつくられて全国に行き渡ったのであろう。熊野詣をする人びとがまるで蟻道のようにつらなつたという中世に、熊野詣の僧安珍にからまる清姫との日高川縁起もつくられている。日高川縁起ばかりでなく熊野詣は数え切れない現実の物語をうんでいるはずである。拝殿上の護摩木に、子宝祈願や安全祈願の文字とともに「ベトナム戦争反対」の文字があった。「みんなのしあわせを」願う文字もあった。時代は個人が世界の平和を祈らずにはいられないところにきている。

熊野川の川ぞいを、さかのぼって約一時間半、神さびてしずまる本宮にまいった。うれしかったのはここが、女人を忌避しない神域であると、うたっていることだった。いま、女人忌避は少なくなつたが、ここでは、和泉式部の昔から、女人の障りを、気にしない神域なのだという。人間としての女性の生理をいやしめない風習なのはめずらしい。ほんとうは、いやしむどころか、神秘であり、尊厳であるのだが、それは不浄とされていた。

清楚で厳肅な本宮にも、華麗な色彩の新宮にも、あまり人出はない。お滝をのみ仰いで帰ってしま
う人が多いからだろうか。もとより信仰での第一目的は本宮詣なのだが、三社にわたる熊野聖域の規
模のひろさを思うと、かつての熊野信仰の複雑な性格がわかるような気がする。昔は本宮にもうでる
にも、音無川の川原を、裾もあげずに歩いて渡ることが、礼儀でありみそぎとされていた。清らかな
川と、激しい滝と、はろけき海と。

すっかり干あがつたうえ、本宮移転でその意義を失った音無川と、いまは補陀落渡海のことなど、
思いみる人もなくなった浜にくらべて、大滝のみは、かわりなくたぎり落ちつづける。その上流の水
筋に、へんな変化がなく、いつまでもみごとに垂直の滝を、顕現させていてほしいと思う。あの、夕
暮のほの白い滝を描きだす力があればと、絵に遠い自分が残念である。

鳴神の舞台 雲ヶ畑志明院

聖域というものは、本来、心で感じるものであろう。立入禁止の札がかかっている、いつでも、心に畏れを感じぬところもあるし、何の禁札にあわなくても、おのずと厳肅な気持になるところもある。さまざまな土地をたずねていると、なるほど、お寺や神社のたっているところには、いい場所が多い。自然に一種の格があつて、誰の心にも敬虔な思いを呼びさます力をもっている。

京は加茂の水。

京の水で育ったら美しうなるといわれる。たしかに、京の人びとは水に恵まれているといえるだろう。東京、大阪の川がすでに黒いドブと化した現在も、加茂川の水はまだ美しさを保っている。何とか加茂川を美しく守りましょうという呼びかけで、みえぬ努力もはらわれている。この間、白川を美しくしようというビラがまわってきて、その日、買物にでておどろいた。近くの疏水に、これまで見たこともないほど美しく無色の水が流れていた。付近の人びとがゴミを棄てずに清潔にすれば、たちまちこんなすがすがしい表情をとり戻すのだ。北白川独特の、川床の白砂が、透き通ってみえる。こ

ういう京は好きである。

京を貫いて、その山紫にむかう水明の加茂川の上流をたずねる。貴船も聖域である。そして雲ヶ畑も淨域である。雲ヶ畑には岩屋山金光峯寺志明院しんみょういんがあつて、岩屋不動と親しまれている。役の行者の開創とされる、行場である。岩屋が多く、山の至るところに、何かのほこらがある。いつか、五月にやってきて、山を足のむくまに歩きまわったことがあつた。しゃくなげの咲いているのはどこかしら、と探しながら、足もとに氣をとられて、あたりを眺める余裕もなく歩いていた。すこし疲れたのかのぼる足が木の根にひっかかつて、つまずいてしまった。

がつくりとしてつまずいたまゝ見たすと、そこがもう、しゃくなげの花の中心であつた。氣づかないうちに、しゃくなげ山に入りこんでいたのである。いちめんの淡紅のしゃくなげは、室生寺のしゃくなげよりも無雜作に、私を包んでいた。明るく美しく、もののけのでる志明院とは思われない。それまで、司馬遼太郎さんはたびたび、志明院にもののけがでると話されていた。「昔は町の中にもいたもののけが、だんだん山に追いつめられてしもたんです。今では雲ヶ畑の志明院ぐらいしか、いないではありませんか。僕が泊った時は、たしかにもののけの氣配がしましたよ」

にぎやかになる町から追われて、もののけの逃げこんだ志明院。ときに、この近代文明に弱り果てて、人間のつくりだす騒音や埃から逃げだしたくなる私には、そのもののけたちの方が人間よりもよほど敏感で健康な存在に思われた。もののけたちの住むことのできる場所は、まず静かで清潔で幽幻